

第6章

多部族国家と複数政党制

1980年代末、ソ連、東欧諸国を席卷したいわゆる政治的民主化の炎は、90年代に入るとアフリカ大陸にも飛び火し、その炎はアフリカ諸国を政治的動乱に巻き込んだ。この政治的民主化の中心的課題は複数政党制への移行であった。

サハラ以南アフリカの48カ国(表6-1参照)のうちで、1989年末の時点で複数政党制に基づく議会制をとっていた国は、74年に複数政党制に移行したセネガルなどわずかに7カ国(90年に独立したナミビアのそれを含む)にすぎなかった。その他の国々は、文民一党制ないしはクーデタによって成立した軍事政権のもとにあった。

1980年代末までサハラ以南アフリカの47カ国(93年にエチオピアから分離独立したエリトリアを除く)のうち40カ国で文民一党制ないし軍政が維持されてきた理由は、どこにあったのだろうか。少なくとも文民一党制ないしは軍政の政権担当者は、自国のこの多部族性という現実を自らの体制の正当化の根拠としてきたのである。

しかし政治的民主化の潮流のなかで、1990年1月から94年末までに40カ国のうち31カ国が複数政党制に移行し、新体制のもとでタンザニア、チャドを除いては選挙も実施している。多部族性という現実のなかでのこの移行の過程で、各国の部族という枠組みはどのような機能を果たしたのであろうか。

ここでは、1990年5月に複数政党制に移行し、同年10月、その複数政党制のもとでの初の大統領選挙を実施したコートジボワールを事例としてとりあ

東	27	エチオピア	B.C.100	△															新憲法 1993年独立 憲法改正
	28	エリトリア	1993	—															
	29	ジブチ	1977	△				○											
	30	ソマリア	1960	△															
	31	スーダン	1956	△	☒														
	32	ケニア	1963	△	△				○										
	33	ウガンダ	1962	△	△														1995年未までに新憲法 憲法改正
	34	タンザニア	1961	△	△														
	35	アンゴラ	1975	内															
	36	モザンビーク	カ	内															
	37	ザンビア	1964	△															
	38	マラウイ	カ	△															
	39	ジンバブエ	1980	△															
	40	スワジランド	1968	△															
	41	ボツワナ	1966	△															
	42	レソト	カ	△															
	43	ナミビア	1990	△															
	44	南アフリカ	1910	△															
	45	マダガスカル	1960	△															
	46	コモロ	1975	△															
	47	モーリシャス	1968	△															
	48	セイシエル	1976	△															
インド洋					○ 複数政党制	7	3	7	11	8	3	38							憲法改正 複数政党承認 1968年以降
					△ 一党制	31						2							
					☒ 軍政	5						4							
					内 内戦	3						4							
					△ 君主制	1						1							
		合 計																	

(注) ☆クオーダ。

(出所) E.I.U., Country Report, 各国版より筆者作成。

げ、この問題を具体的に検討する。

I 1990年選挙とその開票結果

コートジボワールは、独立以来1990年までの30年間、ウフェ・ボワニ大統領の率いるコートジボワール民主党 (Parti Démocratique de Côte d'Ivoire: PDCI) の一党制を堅持し、アフリカ諸国の間では最も政治的安定を享受してきた国のひとつであった。独立前年の1959年4月、自治共和国の立法議会議員選挙の際にウフェ・ボワニは既存の他の政治諸勢力をPDCIに統合することに成功し、全議席(100議席)を獲得した⁽¹⁾。それ以来、憲法でとくにそのための規定を設けたことはなかったがPDCIの一党制を維持してきた。1980年の総選挙からは、党が準備した単一の候補者リストに対する信任投票という方式に代えて、国民議会議員と地方自治体議員の選挙の場合には複数の候補者の立候補を容認することになったが、それはPDCIの党員にかぎられ、一党制という枠組みだけは保持されてきた。

このような事態の推移のもとで、1980年代末からようやく高まってきた複数政党制移行の要求の声に対して、89年9月に開催された国民の各界各層の代表者との「対話集会」の席上で、ウフェ・ボワニ大統領は、次のように答えている。

「われわれが植民者たちから継承したのは、『国家』(Etat)であって、『民族』(Nation)ではない。民族形成には長い年月を要する。民族統合は10年や20年で実現できるものではない。フランスはそこに到達するまでに数世紀を要した。われわれの場合は彼らより早く実現できるであろうと私は思う。しかしながら、1人のバウレ (Baoulé) 人 (コートジボワールの一部族でウフェ・ボワニはこの部族出身—引用者注) が自分をバウレ人とみなす前にイボワール人であると意識するまでには、今日まだ至っていない。それは他の60の部族についても同様である。……

われわれの親愛なる友人エテ (Etté) 氏 (複数政党制移行の提唱者の一人、高等教育・研究アフリカ人組合書記長。ギニア湾沿岸のジャックヴィル <Jacquesville> 市出身—引用者注) は、熱烈な複数政党制主義者である。もう一人、バボ (Gbagbo) 氏 (1982年の学生ストの指導者で、その後88年秋までパリで亡命生活。中西部のガニョア <Gagnoa> 市近郊のベテ <Bété> 族出身。後述するように1990年大統領選に出馬—引用者注) もそうである。私は彼らに挑戦を試みたい。友好的な全く敵意のない挑戦である。まもなくわれわれは総選挙を迎える。エテ氏にはガニョア市に、バボ氏にはジャックヴィル市にそれぞれ行ってもらおう。彼らは票を集められないどころか、立候補さえできないであろう。」⁽²⁾

つまり、ウフェ・ボワニ大統領は複数政党制への移行を時期尚早として一蹴したのである。なぜ時期尚早と考えるかといえば、複数政党制の前提となる同質的な民族が、コートジボワールには未だ形成されるに至っていないとウフェ・ボワニは判断するからである。そのような状況のもとで複数政党制を導入すれば、それは部族的基盤に立つ部族主義政党の林立を招くことになり、それらの間の政治抗争はコートジボワール国家そのものの存立を危機にさらしかねないというわけである。

しかし現実の事態の推移としては、このウフェ・ボワニ大統領の演説後わずか6カ月でコートジボワールは複数政党制への移行を決定することになった。すなわち1990年2月、いわゆる構造調整政策の一環として政府が公務員などの給与引下げを骨子とする国家財政再建案を発表するや、これに反対する抗議行動がアビジャン市を中心に展開され、コートジボワールは建国以来、最大の政治危機に直面する⁽³⁾。その最中、4月30日、ウフェ・ボワニ政権は事態収拾策のひとつとして複数政党制への移行を決定したのである。そして5月6日には、かねてから複数政党制への移行を主張し、さきに引用したウフェ・ボワニ演説のなかでもその名をあげられたローラン・バボ (Laurent Gbagbo) の率いるイボワール人民戦線 (Front Populaire Ivoirien: FPI) ほか2党が公認されたのを皮切りに、その後、20をこえる政党が続々と名乗りをあげ公

認された。

こうして1990年秋に行われた独立以来7度目の総選挙は、初めて複数政党制のもとで実施されることになったのである。投票は10月28日の大統領選挙を皮切りに、11月25日に国民議会議員選挙、12月30日には地方自治体議員選挙、と3回に分けて行われた。

すでに述べたように複数政党制移行の決定を受けて、1990年5月以降、20をこえる政党が名乗りをあげていたわけであるが、この総選挙で、実際に自党の候補者を擁立し選挙戦に臨んだ野党の数は、最も多かった国民議会議員選挙の場合でも18政党にとどまった。PDCIの一党制のもと、いわば無風状態のなかで行われてきた過去6回の総選挙と異なり、初めて複数の政党の立候補者が競う選挙ということで選挙運動も過熱し、また投票管理上の不手際などもあって若干の混乱が発生したものの、投票、開票とも無事終了した。

以下、この総選挙の開票結果を前記のウフェ・ボワニ大統領が時期尚早論の論拠とした多部族性との関連で検討してみよう。

1. 大統領選挙

政府与党PDCIからは、結局、ウフェ・ボワニ大統領が85歳の高齢をおして7選をめざして立候補することになった。他方、野党側ではFPIのパボ書記長が2、3の他の野党の支持をとりつけてただ1人立候補しただけで、大統領選挙は両候補の一騎打ちとなった。5年前の1985年大統領選挙ではもちろん対立候補はなく、当時の新聞発表⁽⁴⁾によれば投票率は99.98%、そして得票率は前代未聞の100% (351万6542票) という極限的な信任を得て6選を果たしたウフェ・ボワニにとっては、対立候補が登場すること自体、青天の霹靂であったに違いない。

開票結果は表6-2にみるようにウフェ・ボワニが81.7%の支持票を獲得して7選を果たした。しかし30年間にわたって一党制を維持してきたこの国で、複数政党制への移行後わずか半年たらずで、しかも従来の選挙制度を踏襲し

表6-2 1990年総選挙の開票結果

	有権者数 (人) (A)	投票者数 (人) (B)	B/A ×100 (%) (C)	有効投票数 (D)	得票				I/D ×100 (%) (J)
					票数 (E)	E/D ×100 (%) (F)	票数 (G)	G/D ×100 (%) (H)	
I 大統領選挙 中間発表 ¹⁾ (開票率77.2%) 最終結果 ²⁾	3,403,396 4,408,809	1,896,684 3,048,964	55.7 69.2	1,839,962 2,993,806	〈ウフエ・ポワニ〉 1,396,650 2,445,365	75.9 81.7	〈バボ〉 443,312 548,441	24.1 18.3	— —
II 国民議会議員選挙 ³⁾	4,646,962	1,869,929	40.2	1,844,741	〈PDCI〉 1,328,631	72.0	〈FPI〉 375,284	20.3	〈その他〉 140,826

III 地方自治体議員選挙 ⁴⁾ 議席獲得自治体数	PDCI	FPI	無所属	計
	124	6	3	133

(出所) 1) *Fraternité Matin*, 30 octobre 1990 (全国157選挙区中, 121選挙区についての選挙区別得票結果中間発表より筆者作成).
 2) *Ibid.*, 8 novembre 1990.
 3) *Ibid.*, 28 novembre 1990 (立候補者別得票数一覧より筆者作成).
 4) *Ibid.*, 2 janvier 1991.

てこの選挙が実施されたということを勘案するならば、約55万票（18.3%）の支持を得たバボ候補は予想以上の善戦であったともいえよう。バボの得票率は、法定得票率10%を優に上回り、2000万CFAフラン（邦貨換算1000万円）の供託金の没収も免がれた。この高額の供託金制度は、大統領選挙の直前にPDCI一党制下の国民議会で野党候補封じ込め策として、突如、提案され可決制定されたものであった。

バボ候補は、10月30日の中間発表（開票率77.2%、全国157選挙区中121選挙区）⁽⁵⁾の段階で出身地のガニョア県（4選挙区）をはじめ、13の選挙区でウフェ・ボワニを上回る票を獲得した。予想外であったのは、アビジャン市に隣接するアゾペ（Azopé）県の6選挙区とアビジャン県アレペ（Alépé）郡でのバボ候補の勝利であった。III節で詳述するように、アゾペ県はアビジャン県アレペ郡を含めて部族的にはアキエ（Akié）人の居住地域である。このような結果は関係者にとって予想外の衝撃であった。開票結果が明らかになった直後の11月6日、アキエ人の各界代表者600名が大挙してウフェ・ボワニの私邸を訪問し、選挙結果について遺憾の意を表したという新聞報道は、やや奇異にも感じられるが、その衝撃の大きさを物語っていた。

2. 国民議会選挙

大統領選挙の4週間後、11月25日に行われた国民議会議員選挙においてもバボの率いるFPIは、大統領選でのバボ票を上回る得票率20.3%を獲得して善戦した。しかし後述するように現行の選挙制度が不利に働いて、議席数では175議席中9議席を獲得するにとどまった（表6-3）。

この国民議会議員選挙ではFPI以外の諸野党も候補者を擁立して選挙戦に臨んだが、表6-3でみるように全国157選挙区中、98選挙区に112名の候補者を送り込んだFPIと比較すると、他の17政党の規模はきわめて小さく全国的な基盤を有していないことが、この選挙を通じて明らかになった。FPIを除く野党17党のうち、アビジャン市のココディ（Cocody）選挙区で委員長F・

表6-3 1990年国民議会議員選挙結果

	PDCI	FPI	PIT	USD	PSI	PRCI	その他 (13党)	無所属	合計
1. 立候補者数 ¹⁾ (人)	238	112	34	21	8	20	22	36	491
(選挙区数)	(157)	(98)	(28)	(19)	(8)	(19)	(21)	(29)	(157)
2. 当選者数 ²⁾ (人)	163	9	1	0	0	0	0	2	175
3. 得票数 ²⁾	1,328,631	375,284	37,114	28,643	7,650	5,337	11,267	50,815	1,844,741
(得票率, %)	(72.0)	(20.3)	(2.0)	(1.6)	(0.4)	(0.3)	(0.6)	(2.8)	(100.0)

(注) PIT (イボワール労働者党), USD (社会民主同盟), PSI (イボワール社会党) はFPI派, PRCI (コートジボワール共和国 <Parti R publicain de C te d'Ivoire>) は親PDCIの立場に立つ。

(出所) 1) *Fraternit  Matin*, 17-18 novembre 1990 (立候補者一覧より筆者作成)。

2) *Ibid.*, 28 novembre 1990 (立候補者別得票数一覧より筆者作成)。

ヴォディエ (Francis Wodi ) が当選したイボワール労働者党 (Parti Ivoirien des Travailleurs: PIT) でも、28選挙区に34名の候補者を擁立したにすぎなかった。得票率もPIT以下17党の合計でもわずか4.9%にとどまった。

全国157選挙区は、原則として1区定員1名の小選挙区制である。例外的に定員2名の選挙区が14、さらに人口規模でアビジャン市につぐ大都市であるブアケ (Bouak ) 市だけが定員5名となっている。しかしこれら15の選挙区でも、各党派は定員に見合った候補者リストを提出し、党派別の得票数で1位になった党派がその選挙区的全議席を獲得するという方式であった。そもそも小選挙区制が、少数派野党にとっては不利であるのに、この方式はさらにその不利さを倍加するものであった。事実、4つの2人選挙区ではFPIが40%以上の得票率であったにもかかわらず、2人選挙区で議席を獲得したのは1選挙区の2議席のみであり、ブアケ市では77.2%の票を獲得したPDCIが5つの議席を独占する結果となった (表6-4)。

FPIをはじめ野党、無所属が候補者を1名も擁立しなかった選挙区は40区あり、それらの選挙区ではPDCIが無競争で当選する (それでも投票は行われた。11選挙区14名)か、PDCIの複数の候補者(最多は1名の定員に6名の候補者)が議席を争うという、1980年選挙から導入された方式そのままの選挙となった。PDCIの複数の候補者間だけで議席が争われた選挙区は29に達した。そ

表 6-4 1990年国民議会議員選挙における複数定員選挙区の党派別得票率

選挙区No.	選挙区名	定員(人)	PDCI		FPI		その他		
			当○ 落×	得票率 (%)	当○ 落×	得票率 (%)	当○ 落×	党派	得票率 (%)
1	Abobo	2	○	63.3	×	36.0	×	PPI	0.7
2	Adjamé	2	○	68.1	—	—	×	USD	31.9
10	Yopougon	2	○	52.0	×	44.7	×	PIT	2.4
							×	PRCI	0.9
40	Béoumi	2	○	100.0	—	—	—		—
45	Bondoukou	2	○	75.7	×	24.3	—		—
54	Bouaké	5	○	77.2	×	17.2	×	PIT	2.0
							×	無所属	3.6
69	Daloa	2	○	60.5	—	—	×	USD } * PSI }	39.5
83	Divo	2	×	48.6	○	51.4	—		—
91	Gagnoa	2	○	58.8	×	41.2	—		—
103	Korhogo	2	○	100.0	—	—	—		—
137	Soubré	2	○	56.1	×	41.0	×	USD	2.9
145	Tiassalé	2	○	83.6	×	16.4	—		—
148	Toumodi	2	○	100.0	—	—	—		—
151	Yamoussoukro	2	○	100.0	—	—	—		—
155	Tiébissou	2	○	96.4	×	3.6	—		—
計(人)		33	31		2		0		

(注) * 連合。

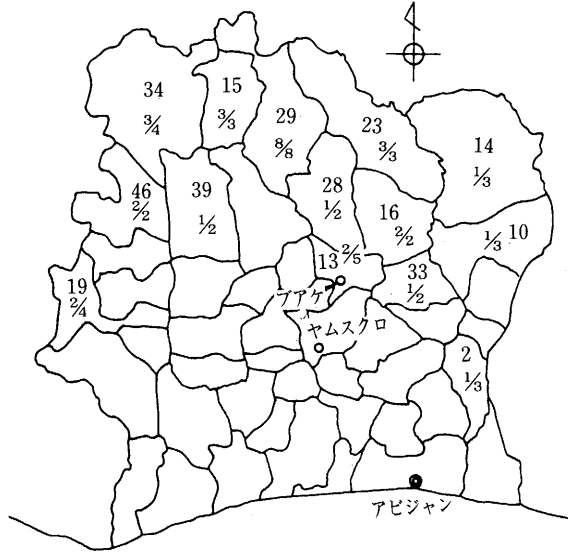
○印は当選。×印は落選。—印は立候補者なし。

(出所) *Fraternité Matin*, 28 novembre 1990 (立候補者別得票数一覧より筆者作成)。

の地理的分布(図6-1)をみると、コロゴ(Korhogo)県の8つの選挙区をはじめとして、北部に偏在していることが分かる。これらの選挙区では、地域内の対立がPDCI対FPI以下の野党という全国レベルの対立にすくい上げられることがなく、PDCIの傘のもと、地域的枠組みのなかにとどまっていたことを意味している。

また他党からの立候補があったにもかかわらず、PDCIから定員をこえる複数の候補者が立候補した選挙区が3つあった⁽⁶⁾。これはPDCIが30年にわたる一党制のもとで、党組織の統率力がかなり弛緩してきていることを示す事

図6-1 1990年国民議会議員選挙においてPDCIのみが複数候補者を立てた選挙区の地理的分布



(注) 数字は県No(表6-5参照)。分数は分母が県内選挙区数、分子がPDCI複数立候補の選挙区数を示す。

(出所) *Fraternité Matin*, 17-18 novembre 1990 (立候補者一覧より筆者作成)。

実といえよう。

次に全国157選挙区を県別にまとめて各党の得票数をみてみよう(表6-5)。図6-2はPDCIの得票率が高かった県、図6-3はFPIの得票率が高かった県をそれぞれ示したものである。

図6-2は、PDCIがFPI以下の新興政治勢力の挑戦を受けることになった今回の選挙で、ゆるぎない強さをみせたのは中部から北部にかけてであったことを示している。これらの地域は、部族的にはウフェ・ボワニの出身部族バウレと、ボルタ(Volta)語系のセヌフォ(Sénoufo)族の居住地域とほぼ重なっている(図6-4)。

他方、図6-3は、同様にFPIの支持率が高かったのは、大統領選挙の場合

表6-5 1990年国民議会議員選挙における県・党派別得票率

県名	選挙区数	定員(人)	立候補者数(人)					当選者数(人)		投票率(%)	得票率 ²⁾ (%)		
			計	PDCI	FPI	その他	無所属	PDCI	FPI他		PDCI	FPI	その他 ³⁾
1 Abidjan (市)	10	13	46	14	11	19	2	11	29.9	58.0	30.3	11.7	
同 (郡部)	10	10	34	10	10	10	4	10	41.6	58.1	31.1	10.8	
2 Abengourou	3	3	10	4	2	4	0	3	28.2	61.1	18.6	20.3	
3 Aboisso	4	4	11	4	4	3	0	1	36.9	74.7	21.5	3.8	
4 Adzopé	6	6	24	6	6	11	1	6	44.8	42.4	39.5	18.1	
5 Agboville	4	4	14	4	3	4	3	4	45.1	57.6	22.7	19.7	
6 Agnibitekrou	1	1	2	1	1	0	0	1	43.3	80.9	19.1	—	
7 Bangoro	1	1	3	1	1	1	0	1	44.9	53.9	44.3	1.8	
8 Béoumi	2	3	3	3	0	0	0	3	45.0	100.0	—	—	
9 Biankouma	2	2	7	2	2	3	0	2	45.1	66.4	30.5	3.1	
10 Bondoukou	3	4	9	5	3	1	0	4	42.6	74.8	25.2	0	
11 Bongouanou	4	4	12	4	3	4	1	4	36.6	68.8	15.6	15.6	
12 Bouaflé	3	3	10	3	3	2	2	3	48.2	82.0	15.4	2.6	
13 Bouaké (市)	1	5	20	5	5	5	5	5	31.9	77.2	17.2	5.6	
同 (郡部)	4	4	9	7	0	1	1	4	45.3	99.7	—	0.3	
14 Bouna	3	3	8	5	2	0	1	3	27.7	68.4	6.0	25.6	
15 Boundiali	3	3	8	8	0	0	0	3	56.2	100.0	—	—	
16 Dabakala	2	2	5	5	0	0	0	2	48.6	100.0	—	—	
17 Daoukro	2	2	4	2	2	0	0	2	78.9	99.3	0.7	—	
18 Daloa	5	6	15	6	3	5	1	6	34.6	61.0	21.8	17.2	
19 Danané	4	4	11	8	3	0	0	4	37.7	79.9	20.1	—	
20 Dimbokro	4	4	6	4	2	0	0	4	55.4	92.5	7.5	—	
21 Divo	5	6	19	7	6	4	2	4	31.8	55.1	38.3	6.6	
22 Duékoué	1	1	4	1	1	1	1	0	41.0	38.0	39.1	22.9	
23 Ferkessédougou	3	3	10	10	0	0	0	3	55.5	100.0	—	—	
24 Gagnoa	4	5	13	5	5	1	2	2	46.3	42.0	57.1	0.9	

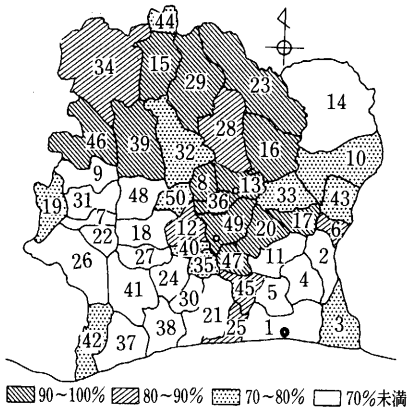
25	Grand-Lahou	1	1	3	1	0	1	1	1	0	1	0	73.5	89.7	—	10.3
26	Guiglo	3	3	8	3	3	2	0	0	3	0	0	45.5	55.9	29.9	14.2
27	Issia	2	7	7	2	2	3	0	2	0	0	0	44.4	54.5	43.5	2.0
28	Katiola	2	2	8	7	0	1	0	0	2	0	0	36.7	89.1	—	10.9
29	Korhogo	8	9	25	25	0	0	0	0	9	0	0	52.2	100.0	—	—
30	Lakota	2	2	5	2	2	0	1	1	2	0	0	50.0	51.6	47.5	0.9
31	Man	5	5	12	5	5	2	0	5	0	5	0	44.5	65.4	33.4	1.2
32	Mankono	3	3	8	3	2	1	2	2	3	0	0	46.3	78.1	5.9	16.0
33	M'bahiakro	2	2	4	3	0	0	1	1	2	0	0	54.0	77.5	—	22.5
34	Odienné	4	4	12	10	1	0	1	1	3	1(無)	0	52.0	83.9	0.2	15.9
35	Oumé	2	2	6	2	2	2	0	2	0	0	0	39.8	71.0	23.7	5.3
36	Sakassou	1	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	85.8	100.0	—	—
37	San-Pédro	2	2	5	2	2	1	0	2	0	0	0	24.0	64.3	35.2	0.5
38	Sassandra	2	2	5	2	2	1	0	2	0	0	0	26.9	68.4	31.0	0.6
39	Séguéla	2	2	7	5	1	1	1	0	2	0	0	40.2	90.9	2.7	6.4
40	Sinfra	1	1	2	1	1	1	0	0	1	0	0	37.5	73.3	26.7	—
41	Soubré	2	3	8	3	3	2	0	3	0	0	0	35.8	56.0	40.5	3.5
42	Tabou	1	1	2	1	1	0	0	1	0	0	0	24.5	79.0	21.0	—
43	Tanda	4	4	9	4	2	3	0	4	0	0	0	52.0	75.1	5.2	19.7
44	Tengréla	1	1	2	1	1	0	0	1	0	0	0	33.9	73.1	26.9	—
45	Tiassalé	1	2	4	2	2	0	0	2	0	0	0	34.1	83.6	16.4	—
46	Touba	2	2	6	6	0	0	0	0	2	0	0	41.4	100.0	—	—
47	Toumodi	1	2	2	2	0	0	0	0	2	0	0	65.8	100.0	—	—
48	Vavoua	2	2	8	2	2	2	2	2	2	0	0	32.1	60.3	24.9	14.8
49	Yamoussoukro	5	7	9	7	0	2	0	7	0	0	0	63.3	99.2	—	0.8
50	Zuénoula	2	2	6	2	0	2	2	2	0	0	0	52.5	71.4	—	28.6
計		157	175	491	238	112	105	36	163	12	40.2	72.0	20.3	7.7		

(注) 1) (F)はFPL, (T)はPIT, (無)は無所属。
 2) 得票率は、ここでは投票総数ではなく有効投票数を100とした比率。

3) 無所属を含む。

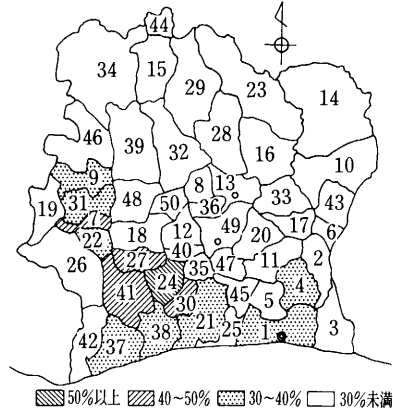
(出所) *Fraternité Matin*, 28 novembre 1990 (立候補者別得票数一覧より筆者作成)。

図 6-2 1990年国民議会議員選挙におけるPDCI高得票率県の地理的分布



(注) (1) 数字は県No。
 (2) 1のアビジャン県アビジャン市は70%未満、13のブアケ県ブアケ市は70~80%。
 (出所) 表6-5より筆者作成。

図 6-3 1990年国民議会議員選挙におけるFPI高得票率県の地理的分布



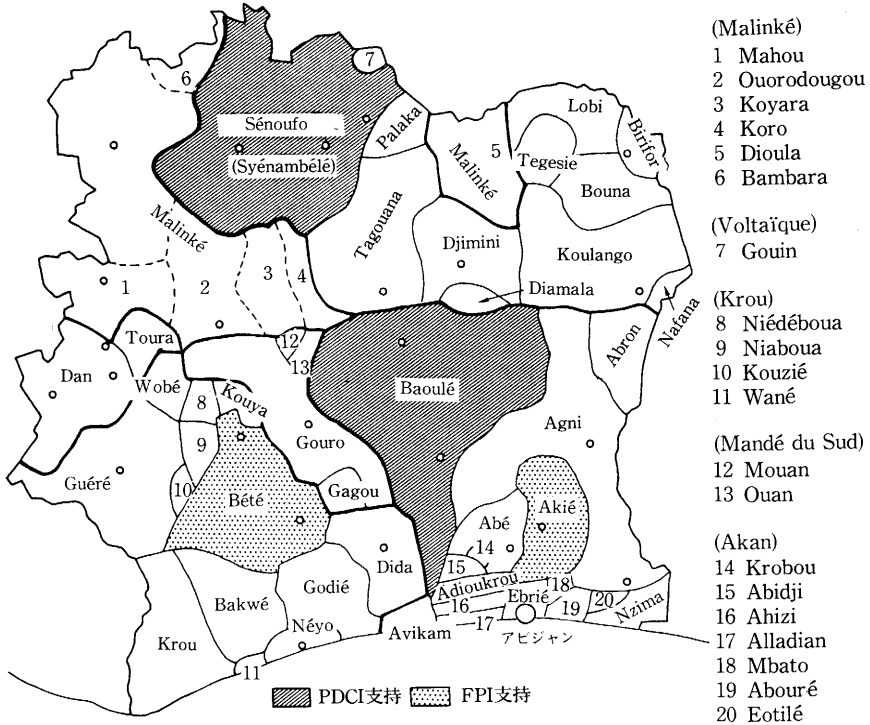
(注) (1) 数字は県No。
 (2) 22のドゥエクエ県は39.1%ながらPDCIの38.0%に勝ちFPIの候補が当選。
 (3) 1のアビジャン県アビジャン市は30~40%、13のブアケ県ブアケ市は、30%未満。
 (出所) 表6-5より筆者作成。

と同じくバボ書記長の出身地ガニョア県とその周辺、それにアゾベ県、アビジャン県(市および郡部)であったことを示している。これは部族的にはバボ書記長の出身部族ベテの居住地域およびアキエ族の居住地域とほぼ重なっている。ただしFPIの場合は、地元ガニョア県でもその得票率は57.1%にとどまり、ここ以外に50%をこえたところはなかった。

3. 地方自治体議員選挙⁽⁷⁾

12月30日に実施された133の地方自治体の議員選挙は、国民議会議員選挙の複数定員選挙区の場合と同様に、人口規模に比例して定められた小は25名

図6-4 コートジボワールの部族分布と政党支持



(出所) Yves Marguerat, *Des ethnies et des villes*, Abidjan: Centre ORSTOM de Petit Bassam et la Direction de la Statistique de Côte d'Ivoire, 1979, p. 4. の族分布地図を元に筆者が作成。

から大は50名の定員に見合った候補者リストを各党派が提示し、その党派間で得票数を競い、最大の得票を得た党派が議席を独占するという方式で行われた。

この選挙でPDCIは133のすべての自治体でひとつないしは複数の候補者リストを提出した。これに対して野党側が単独で候補者リストを提示したのは、FPIの22自治体とPITの1自治体だけであった。その他ではPIT, 社会民主同盟 (Union Socialiste Démocratique: USD), イボワール社会党 (Parti Socialiste Ivoirien: PSI) の3党がそれぞれFPIとの連合を組み、それぞれひと

つの自治体に1組の候補者リストを提出した。この選挙でも、野党側ではFPIが他の諸政党とは隔絶した大きな力を有していたことが示されている。

選挙の結果はPDCIの圧勝に終わり、133自治体のうち124自治体の議席を獲得し、FPIが勝利をおさめたのはわずかに6自治体にとどまった。その他の3自治体では無所属グループが勝った(表6-2)。FPIが勝利した自治体の地理的分布をみると、大統領選挙、国民議会議員選挙でFPIが善戦したアゾペ県(図6-3の4)の5自治体のうち3つ、バボ書記長の出身地ガニョア県(図6-3の24)の3自治体(うち1自治体では手続き問題で紛糾し、後日、再選挙となる)のうちひとつ、そのほかはボングアヌ(Bongouanou)県(図6-3の11)のボングアヌ市、ディボ(Divo)県(図6-3の21)のヒレ(Hiré)市であった。ごく大まかにいえば、FPIは国民議会議員選挙でのFPIの勢力範囲を大幅に縮小したかたちの結果に終わったといえよう。

II PDCIと部族主義

独立以来初めて複数政党制のもとで行われた1990年選挙の開票結果は、I節で紹介したウフェ・ボワニ大統領の時期尚早論との関連でどのように評価できるであろうか。

ウフェ・ボワニの時期尚早論に対して、複数政党制移行の推進者の一人であったFPIのバボ書記長は、複数政党制の導入について次のように述べている。彼はまず歴史的事実としてコートジボワール政治史上、1945年から59年までは複数の政党が存在し、かつそれが部族間抗争をもたらすということもなかったことを指摘する。次に彼が主張しているのは、コートジボワールという国の部族構成の特殊性である。

「わが国のような国で、部族的な基盤に基づいて、ひとつの政党を結成しようとするような、無能な政治家が存在するだろうか。わが国の各部族の規模はいずれも小さく、だれもそれを跳躍台として利用しようなどは

考えないであろう。その点、ナイジェリア、ザイール、ルワンダ、ブルンジなどでは、全人口に比していくつかの部族が、もしその気になれば、国政の水準で重きをなすことができる規模を有している。……コートジボワールの人口は約1000万だが、最も大きな部族でもその人口は90万ぐらいである。このくらいの規模で何ができるというのか、何もできない。

したがって私は、この国には部族間抗争の危険は存在しないと考える。このことは、個人が部族主義的行動をとらないということを意味してはいない。もちろん、部族主義的行動をとり、それに満足している人々がたくさんいる。しかし、この国ではそれを望んでも、ひとつの部族を基盤にし、他の部族を犠牲にして、その部族の要求を満足させることを目的として政治を行うことはできない、と私はいいたいのである。部族間抗争の危険は存在していない。それを振りかざし、誇張し、民主主義に対する恐れからひそかにそれを望んでいるのは権力である。」⁽⁶⁾

バボが指摘しているように、第2次世界大戦後の独立運動期、コートジボワールには複数の政党が存在していたことは歴史的事実である。しかし、この時期の政治活動は植民地体制からの脱却、独立という至上命題のもとの活動であり、また宗主国フランスにおける進歩的諸政治勢力の代理戦争的な要素も複数の政党の結成に関与していた。したがってこの歴史的経験は、全く条件の異なる独立後の国内政治の展開過程のなかでは、ウフェ・ボワニの時期尚早論を杞憂としてしりぞける論拠とはなりにくい。

では第2の論拠についてはどうか。コートジボワールには、単独で絶対的多数派を形成しうるような人口規模を有する部族は存在していないことは、バボが指摘しているとおりである(表2-2参照)。その点でコートジボワールでは複数政党制移行の際に危惧される危険が少ないといえるかもしれない。しかし多数派を形成しうる部族が存在する国々にもおいても、それが部族であるかぎり国家権力の担い手がその部族的偏向を露呈することは部族主義の名のもとにタブー視されていることも事実である。したがって数において優位を占める部族の存在の有無は、それほど重要とは考えられない。またコー

トジボワールでも、単独ではなくとも複数の部族間の連合によって多数派を形成することは可能である。さらにいえば、ウフェ・ボワニ大統領が危惧したことは、バボが指摘したコートジボワールの特殊性、政治的主導権を掌握できる強力な部族が存在しないということだったともいえよう。政治的安定という観点からすれば、ひとたび部族的基盤に立つ諸政党間で政治が展開されることになれば、絶対的多数派を形成しうる部族が存在しないことは、不安定要因であるに違いない。

では、現実の展開はどうであったのだろうか。前節で紹介したように、独立以来初めてFPI以下の野党の挑戦を受けることになった1990年選挙において、PDCIは国民議会議員選挙の得票率でみるかぎり、部族的にはパウレ族とセヌフォ族の居住地域で、ゆるがぬ圧倒的支持を得た。FPI以下の野党の挑戦は、一党制のもとでその超部族性を誇示してきたPDCIの水面下に隠れていた部族的偏りを顕在化させたのである。PDCIを基盤としてそれまで超部族的な存在として国家権力を掌握してきたウフェ・ボワニ政権は、1990年選挙を通じて、少なくともその評価として、部族的偏りを顕在化させることになったのである。

ウフェ・ボワニ大統領の出身部族であるパウレ人がウフェ・ボワニ大統領およびPDCIに圧倒的支持を表明したことは、地元民として当然であったといえよう。ウフェ・ボワニが自分の部族の出身者であるという部族的紐帯に加えて、彼らはそのことによる実利的恩恵に与ってきた。独立以来、1970年代末までの「ミラクル・イボワリアン」(象牙の奇跡)と称された高度経済成長⁹⁾の成果は、ウフェ・ボワニの生地ヤムスクロ (Yamoussoukro) 市を中心に、道路、住宅、学校、保健・衛生施設など社会的間接資本の拡充という目にみえるかたちで結実している。ウフェ・ボワニおよびPDCIを1990年選挙で選択したことは、ほとんどのパウレ人にとっては、自らの利益にかなった経済合理的な選択であったと考えられる。

ではPDCIのもうひとつの強力な支持基盤であることが明らかになったセヌフォ族の場合はどうであろうか。北部のセヌフォ族の居住地域は、1970年

代末までの高度経済成長期、ココア・コーヒー栽培の拡大によって活況を呈した南部の熱帯雨林地帯に比較して、開発の過程から相対的に取り残された地域であった。この開発が遅れていた北部に対して、ウフェ・ボワニ政権は国家主導の開発努力を展開してきた。それはコートジボワール繊維開発公社 (Compagnie Ivoirienne pour le Développement des Textiles: CIDT) による地元農民に対する綿花栽培の奨励、拡大⁽¹⁰⁾とSODESUCRE (Société pour le Développement des Plantations de Canne à Sucre, l' Industrialisation et la Commercialisation du Sucre) による砂糖コンプレックス (精糖工場つきのポンプ灌漑砂糖きび大プランテーション)の造成、建設であった。南部におけるココア・コーヒー栽培の拡大が主に農民自身の自発的活動による自発的發展であったのに対して、北部の開発の場合には国家の主導性が強かった。またその成果はとくに綿花栽培については成功と評価しうるものではあったが、南部のココア・コーヒー栽培の拡大ほどの華々しさはなかった。その分だけ1980年代に入ってから経済不況の衝撃⁽¹¹⁾も、南部のココア・コーヒー栽培農民に比べれば、北部の綿花栽培農民に対するそれは軽微であった。また北部の開発は地元農民の更生、貨幣経済への統合という程度のものであり、南部の場合のように開発に吸引されて移入民が大量に流入してくるといった社会変動もなく、いわゆる伝統的な社会構造は外部からの衝撃を受けることなく温存されてきた。

しかしセヌフォ人の場合、バウレ人のウフェ・ボワニに部族的紐帯をみいだすことはなかった。植民地化前の歴史の過程で形成されてきたこの地域の諸部族のなかにあつて、バウレはアカン語系グループに属する部族であるのに対して、セヌフォはアカン語系グループとは系譜を異にするボルタ語系グループに属する部族である(第3章参照)。この点、次節で述べるようにFPIが高い支持を得たアキエ族がバウレ族と同じアカン語系グループに属する一部族であるのときわめて対照的である。宗教的にもセヌフォ人社会ではジュラ人の移入、それによる彼らとの接触を通じてイスラム教がかなり浸透しているのに対して、バウレ人社会ではフランスによる植民地化の過程で沿岸から

カトリックが侵入し、ウフエ・ボワニも熱心なカトリック信者であったことは周知のとおりである。このように族的にも、宗教的にもバウレ族とはきわめて異色なセヌフォ族が、PDCIの強力な支持基盤となった理由はどこにあったのだろうか。

それは伝統性の強いセヌフォ人社会の支配者層とバウレ族の象徴であるウフエ・ボワニとの個人的な関係に基づいて、その関係が増幅され、バウレ＝セヌフォ部族連合といえるほどの近密な関係が形成されていたからである。これに対してバボのFPIの本拠となったベテ族は、セヌフォ族にとって系譜的に異なるクル語系グループに属している部族であるというばかりでなく、地理的にも居住地域が隔たっており、お互いに疎遠な存在であった。

1990年選挙の際、セヌフォ族の居住地域の中心都市コロゴの元市長、前国民議会議員のランシネ・G・クリバリ (Lanciné Gon Coulibaly) が、選挙直前にFPIから脱党しPDCIに復帰した事件は、バウレ族とセヌフォ族の近密な部族的関係を象徴する出来事であった。大統領選挙が終わったのち、国民議会議員選挙を直前に控えた11月14日、FPIの中心的な指導者の一人、クリバリはPDCIへの復帰を発表する。その経緯をPDCI機関紙『フラテルニテ・マタン』は大要、以下のように報じている。

この日、クリバリはウフエ・ボワニ大統領専用の小型ジェット機フォッカーで、「ウフエ・ボワニ族の代表者たち」とともにコロゴ市に飛来、彼のPDCI復帰声明の発表のための会場として設営されたデルガム映画館に向かった。冒頭に演壇に立ったボンベ (Bombet) コロゴ県知事 (官選) は「セヌフォ人のウフエ・ボワニに対する忠誠」をたたえ、「人間のなすことに完全はありえず、誤りはつきものだ」と述べた。続いてアボヴィル (Agboville) 県選出国民議会議員ニャンス (Gnansou) が立ち、携行してきたウフエ・ボワニ大統領のメッセージを代読した。そのなかでウフエ・ボワニは、自らが「精神的な父」とあがめたランシネの父⁽¹²⁾との長い深い友情のきずなを強調したのち、「どんな放蕩息子も、人が何と言おうと、へその緒を切りはなすことはなく、ランシネがPDCIという大家族のなかに戻り、彼に与えられた地位を占める

ことになったことは大きな喜びである」⁽¹³⁾と結んだ。

続いてクリバリが演壇に立ち、PDCIへの復帰を自らの口で聴衆の前で宣言したのである。

1982年の大学紛争⁽¹⁴⁾以来、クリバリはPDCIから事実上離脱し、バボと行動をともにしてきた。そしてこの同じコロゴ市に、革新派4野党（FPI, PIT, USD, PSI）の党首が参集し、「複数政党制民主主義の確立のために協力して活動する」ことを誓った「コロゴ宣言」を発表⁽¹⁵⁾したのは、わずか5カ月たらず前の6月23日のことであった。コロゴ市でこの集会を準備したのはクリバリであり、政府当局はこの集会の開催自体は許可したものの、地元のPDCI派の強硬な反対のために彼は自分の邸宅の中庭を集会の会場にあてたのであった。

復帰宣言後の『フラテルニテ・マタン』紙のインタビュー⁽¹⁶⁾に答えてクリバリは次のように述べている。

「私はイデオロギー上の対立からFPIを去ったのではなく、自分にとっての自然的環境（milieu naturel）に戻りたかったからである。」

「私は自分の家族のもとに戻りたいのだが、それは正当なことであろう。私は、自分の父であるとみなしているひとりの人間、私の実父の偉大な友人のひとりであった人間のよびかけに肯定的に答えたいのである。」

「私は、バボの活動に深い尊敬の念を抱いている。私が彼にこのニュースを伝えたとき、彼がそれを喜ばなかったことは当然のことである。しかし、彼には私が数カ月前から（大統領と）接触していたことを知らせてあったこともあって、彼はこの日の来ることを予期していた。」

クリバリの発言は、バボとの政治イデオロギー上の連帯と、部族的というよりは、直接的にはウフエ・ボワニが「父」とあがめ親交のあったボン・クリバリ（Gbon Coulibaly）の実子としての家族的紐帯の狭間に立たされることになった一政治家の苦渋が滲みでている。ランシネ・クリバリの父は、コロゴ県（1958年当時、表4-5参照）に住むセヌフォ族、17グループのうち、最大の人口（1950年当時で6万人、132カ村）を誇るキエンバラ（Kiembara）の大首

長であった（第3章参照）。キエンバラ・グループだけで同名のひとつの区（canton）をなし、ボン・クリバリの政治的権威のもとにキエンバラはさながらひとつの小国家のおもむきがあったと、オラスは記している⁽¹⁷⁾。したがってランシネの家族的紐帯は、キエンバラ全体に、さらにはセヌフォ族全体に比較的容易に拡大され、ランシネにとって強大な圧力となったに違いない。

ランシネ・クリバリはウフエ・ボワニの説得に屈した。クリバリのPDCI復党を喜ぶ地元セヌフォ人たちに対して彼が示しえた唯一の抵抗は、FPIに対する批判的発言を引き出そうとする記者の質問に対して、FPIの活動の正当性、合法性を弁護したこと、また数日後に迫った国民議会議員選挙には出馬しないことを表明したことであった。しかし、クリバリのPDCI復党によってFPIのセヌフォ族地域への進出は頓座し、PDCIはセヌフォ族の支持をつなぎとめることに成功したのである。

このエピソードを通じて一層きわだってくるのは、PDCIの部族主義的性格である。PDCIは、コートジボワール国民を構成する各部族の成員の部族的帰属意識を前提とし、その紐帯に基礎を置いている政党なのである⁽¹⁸⁾。この党の長であるウフエ・ボワニは、超部族的な存在として諸部族の利害関係を調整し、その均衡の上に立って権力を維持してきたのである。コートジボワール国民をPDCIの旗のもとに結集させてきたPDCIの密教的イデオロギーは、部族主義でありその連合である。したがってそのイデオロギーの性格上、原理的に他の政党の存在を容認しえない。PDCIにとって他党の存在は全国規模で確立した部族連合体制の崩壊を意味する。またすでにみたように、他党の存在はPDCIの部族的偏向を顕在化させることにならざるをえない。PDCIは部族連合主義の政党であり、この政党が国家権力をになうとき、その部族的偏向が顕在化することは、まさにその権力にとっては存亡の危機となる。

III FPI台頭の意味

1990年2月から始まったコートジボワール独立以来最大の政治危機の最中、ウフェ・ボワニ政権に複数政党制移行を承認させ、秋の総選挙では国民議会において一定の地歩を築くことに成功したFPIの台頭は、この国の社会経済的発展が醸成したどのような状況に呼応するものであったのだろうか。

ウフェ・ボワニ大統領とFPI書記長バボがともに立候補の手続きを終え、この2人の大統領立候補者名が新聞紙上に発表⁽¹⁹⁾されたとき、ウフェ・ボワニには「ヤムスクロ市在住、農園主 (Planteur)」、バボに対しては「アビジャン市在住、大学教授」という肩書が付されていた。

ローラン・バボは1945年生まれで1905年生まれのウフェ・ボワニよりも40歳も若く、独立運動の経験もウフェ・ボワニと共有していない。歴史学博士の学位を有しコートジボワール国立大学に籍をおいている。すでに大学在学中の1969年に15日間、ついでアビジャン市の高校教師を務めていた71年から約2年間、反政府政治活動の罪にとわれて2度にわたり獄中生活を経験している。そして1982年2月の大学紛争の際、首謀者とみなされたバボは同年4月パリに逃がれ、以来89年9月までの6年余パリで亡命生活を送っていた。1988年9月バボはパリから帰国し、ウフェ・ボワニ大統領と会見し謝罪したことによって両者の和解が成立したと、政府機関紙『フラテルニテ・マタン』は報じた⁽²⁰⁾。

バボは「国外亡命中の私の発言のいくつかは、あなた個人をひどく傷つけることになったことを知った。私はそれらの発言についてあなたに謝罪します」と述べ、ウフェ・ボワニ大統領は「小鳥は大樹と仲たがいはない。小鳥とはこの若者のことであり、大樹とはコートジボワールのことである」と答えてバボの帰国を歓迎したという。

しかしバボは、その後には出版された自著のなかで、この会見の設定自体が「私をわなにはめようとしたもの」であったと釈明している。会談直前の打

ち合わせの席で、バボは側近から複数政党制の問題は後日のこととしてこの会談では触れないでもらいたいと要請されたという。その時点で会談をとりやめて席を立つこともできたが、複数政党制の問題について大統領と論じあう機会を残した方が得策と考え、その会談に応じたとのことである⁽²¹⁾。

いずれにしろこの会談が最終的和解の場とはならなかったことは、その後の事態の推移が示している。同年11月に開催されたFPIの設立準備会の直後、FPIの活動資金提供者でこの会議にも出席した実業家のコベナ・アナキ (Kobena Anaky) が逮捕され、バボ自身もFPIを解散せよと当局から圧力をかけられ、その活動は監視されつづけた⁽²²⁾。

バボの活動に対して陰に陽にさまざまなかたちで加えられた当局の政治的抑圧そのものが、彼の複数政党制移行の要求をますます正当化させる客観的根拠となった。しかし政治的民主化が実現したとき、具体的にはバボが率いるFPIが政党として公認され国民の一定の支持を得たとき、FPIはコートジボワール社会をどのように変革しようと意図しているのであろうか。

バボは新興の野党にふさわしく富の偏在を批判し、より平等な分配、貧困からの解放をスローガンとして掲げているが、経済自由主義を標榜するPDCIに対抗して社会主義的政策をとくに志向しているわけではない。国家の果たすべき経済的役割（具体的には農産物価格支持安定公庫〈Caisse de Stabilisation et de Soutien des Prix des Produits Agricoles: CSSPPA〉、CFAフラン通貨制度など）についての再検討の必要を説いてはいるが、とくにその改革について具体的な提案がなされているわけではない。経済発展にとって必要十分な広さの市場を確保するために西アフリカの経済統合の必要性を主張しているが⁽²³⁾、その主張はこれまでのウフエ・ボワニ政権の政策と必ずしも相反するものではない。要するにFPIとPDCIの対立は、少なくとも経済政策の次元ではあまり明確に現れてはいない。

バボは、FPIの支持基盤について次のように述べている。

「まず第1に、イボワール国民は今日、その大多数が都市民である。1958年に全人口の15%にすぎなかった都市人口は今日、約55%に達している。

そしてイボワール国民は若い。1980年において全人口の54%は20歳以下であった。1985年では15歳以下の人口が42.6%であるのに対し、60歳以上の人口はわずか3.4%にすぎない。

この若年層は、1945年の強制労働の廃止以外のことに正統性の根拠を求めている。われわれは彼らとともに、この新しい正統性を求めそれを築き上げようとしているのである。』⁽²⁴⁾

バボによれば、FPIの支持基盤は都市民であり、若年層である。植民地体制の象徴である強制労働の廃止の正統性とは、いうまでもなくその立役者ウフェ・ボワニの正統性である。1945年、フランス国民議会でウフェ・ボワニ法案によって仏領アフリカ植民地の強制労働制度が廃止されたことは、ウフェ・ボワニの輝かしい功績であり、ウフェ・ボワニ政権の正統性の有力な根拠となってきた史実である。しかし植民地解放、独立運動の指導者としての輝かしい経歴は、独立後30年を経た今日では政権の正統性の根拠としてはもはや通用しなくなっている、とバボは主張しているのである。

FPIは都市民、若年層の党であると自らを規定しているが、1990年選挙においてそれらの層の支持を獲得することに成功したといえるであろうか。もう一度、I節で紹介した開票結果を検討してみよう。

まず第1に、若い世代の支持を期待したFPIではあったが、ウフェ・ボワニの本拠であるバウレ族居住地域と北部のセヌフォ族居住地域では、その拠点さえ築くことができなかった。PDCIが国民党という装いのもとに隠蔽していた強固な部族的支持を顕在化させたものの、その牙城に食いこむことはできなかった。II節で紹介したランシネ・クリバリのPDCI復党の一件は、セヌフォ族居住地域におけるFPI玉砕のエピソードであった。FPIは部族という壁を突き破って全国的に若い世代の支持をとりつけることはできなかったのである。

PDCIがFPIの挑戦を受けてそれまで水面下に隠されていた部族主義的色彩を顕在化させた分、FPIも受動的にそのような性格を帯びる結果となった。PDCIにおけるバウレ族、セヌフォ族に対応するものは、FPIの場合、バボの

出身部族ベテ族と東南部のアキエ族である。しかしこの両部族とFPIとのかかり方は、PDCIに対するバウレ族、セヌフォ族の場合とは異なっていた。

ベテ族、アキエ族はFPIの部族的な支持基盤であったとはいえ、その支持率は相対的に低く、ベテ族の本拠地ガニョア県でもFPIの得票率は57.1%にとどまっている。つまりFPIの場合には、まさに新興勢力にふさわしくベテ族、アキエ族を部族全体として取り込んだのではなく、そのなかに分裂を引き起こしたのである。ベテ族の場合もアキエ族の場合も、政治的には依然としてPDCIを支持する勢力と、それに飽きたらずFPIの支持にまわった勢力とに分裂したのである。PDCIに対するバウレ族、セヌフォ族の場合と異なり、部族を単位としての全面的支持を獲得しえたのではない。

なぜベテ人社会とアキエ人社会では、このような分裂がきわだったかたちで発生しえたのか。それらを裏づける十分な資料は存在しないが、筆者の現地観察⁽²⁵⁾に照らしていえば、この両社会では、とくにアビジャン市に近いアキエ族居住地域では、独立以降の経済発展の過程で階層分化がかなり進行していることが、その最大の要因と考えられる。

アビジャン市に近いアキエ族居住地域は、独立以前からココア・コーヒー栽培が導入され、今日ではすでにこれ以上の栽培面積拡大の余地のない段階にまで達している地域である。他方、ガニョア県は東南部から熱帯雨林地帯を西方に向かって拡大してきたココア・コーヒー栽培の新開地であり、近年ではココア・コーヒー栽培の中心はこの地域に移りつつある。その栽培拡大の過程には、バウレ人をはじめ大量の移入民が参入してきており⁽²⁶⁾、セヌフォ人社会やバウレ人社会に比べれば、いわゆる経済的社会構造の変容・再編はより急速により深く進行しているとみなすことができる。

ではその変容・再編の過程で、FPIはどのような階層を代表する政治勢力として台頭してきたのであろうか。長年のPDCIの一党体制下で、最上層のPDCIに対する支持は変わらず維持されているものとおもわれる。大統領選挙の直後、アキエ人の各界有力者600名がウフエ・ボワニ大統領の私邸を訪れ謝罪したという、I節で紹介したエピソードはその証左といえよう。FPIの支

表6-6 1990年国民議会議員選挙におけるFPI候補者および当選者の経歴
(単位：人,%)

	FPI候補者		国民議会議員当選者		
	候補者数	比 率	当選者数	うちFPI当選者数	比 率
研究・教育	54	48.2	50	7	28.6
技術者	8	7.1	15	0	8.6
会社経営・役員	5	4.5	14	0	8.0
医師・薬局経営	2	1.8	22	1	12.6
農業	4	3.6	9	0	5.1
法曹関係	1	0.9	9	0	5.1
公務員	8	7.1	7	0	4.0
その他	30	26.8	49	1	28.0
計	112	100.0	175	9	100.0

(出所) *Fraternité Matin*, 30 octobre 1990および28 novembre 1990より筆者作成。

持層は、このようなPDCI支持を続ける有力者層に不満をもつ、ココア・コーヒー栽培を経済的基盤として台頭してきた新興の中間層であると考えられる。

第2に、FPIがその支持基盤となることを期待している都市民についてはどうか。1990年春、複数政党制への移行をウフェ・ボワニ政権に決意させる契機となった政治危機の主舞台は、人口200万の経済的主都アビジャン市であった。前年の秋にココア、コーヒーの生産者価格の2分の1という大幅引下げを断行した政府は、公務員などの給与引下げを主な内容とする財政再建案を発表する。これが都市給与生活者の抵抗、反対運動を発生させ、政治危機を醸成することになる。

この反対運動を推進したのは、政府案の給与引下げの対象となった都市給与生活者を中心とする新興の都市中間層であった。大統領選挙に立候補したバボに付せられた「アビジャン市在住、大学教授」という肩書は、彼およびFPIの支持勢力を象徴するものであった。国民議会議員選挙のFPI候補者が届け出た経歴もそれを示している(表6-6)。FPI候補者112名中、54名(48.2%)は研究・教育関係者であった。当選者9名のうち7名は、バボをは

じめとして研究・教育関係者であった。FPIにかぎらずコートジボワールの国民議会議員には研究・教育関係者が多いのは事実であるが、FPIの場合にはそれがきわだっている。

バボがFPIに対する支持を期待した都市民のうち、アビジャン市の場合でもFPIに票を投じたのは投票者の3割、有権者の1割たらずにすぎなかった(表6-5)。その比率は国家公務員を中心とするいわゆるフォーマル・セクターの給与生活者からなる都市中間層の比率に相当し、アビジャン市民の大多数を構成するインフォーマル・セクターで不安定な生活を強いられている最下層民の支持は得られなかったものと推測される。彼らは従来どおりPDCI支持に動員されるか、棄権に回ったものとおもわれる。

以上のことから、やや仮説的な推測も含まれるが、FPIの支持層はベテ族、アキエ族の新興のココア・コーヒー栽培農民と、これまた新興の都市中間層であったと考えることができる。

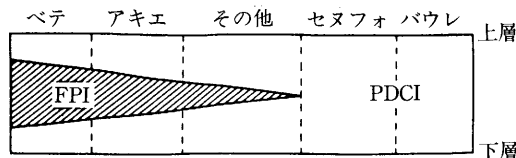
ではこの2つの支持層はどのような共通の利害をもってFPIを支持したのであろうか。筆者の仮説は、両者は家族的、親族的紐帯によってひとつに結びついているというものである。ココア・コーヒー栽培で得た資金で子弟を教育し、その子弟が学業修了後にしかるべき安定した都市職業につき生活するというかたちの家族ないしは親族集団をみいだすことは、コートジボワール南部、とくにアキエ族の地域では容易である⁽²⁷⁾。しかし都市で生活する教育を受けた子弟の社会的地位は、教育の普及とともに相対的に下降しつつあり、また官僚機構などが確立、整備されてくるにつれ、社会的地位上昇の道がより狭くなりつつあるといわざるをえない。ココア、コーヒーの生産者価格の大幅引下げは、出身村との紐帯を保持しつつ生活している都市中間層の生活にも、直接、間接に影響を及ぼさずにはおかない。このような都市と農村にまたがった生活の場を有している親族集団の成員が、FPIの中核的な支持基盤を形成していたといえるであろう。

さらにここで注目すべきは、コートジボワールにおける諸部族の相互関係である。ベテ族がFPIの最大の支持基盤となったことには、FPIの指導者バボ

の出身部族であるという部族的紐帯の要素が強く働いているものとおもわれる。ではアキエ族についてはどうか。アキエ族はすでに指摘したようにパウレ族と同じくアカン語系グループに属する一部族である。クル語系グループに分類されているベテ族よりは、文化的にはパウレ族の方により親近感を有しているはずである。にもかかわらずアカン語系諸族の枠を破ってかなり多数のアキエ人がベテ族を部族的支持母体とするFPIの支持に回った理由はどこにあったのだろうか。

その解答の鍵は、アカン語系諸族の部族関係にあるようにおもわれる。アカン語系諸族のなかにあつて人口的に多数派であり、独立後、ウフェ・ボワニ体制のもとで政治的にも経済的にもその力を増大させてきたパウレ族に対して、アキエ族は周辺的な存在であつた。経済的主都アビジャン市の発展の過程においてもアキエ族居住地域はその周辺化に甘んじてきた。しかも先発のココア・コーヒー栽培地帯として1970年代末までの「奇跡」的経済成長の一翼をになつてきたという自負がある。アキエ部族主義の立場に立てば、独立以降のコートジボワールの経済発展にココア・コーヒー生産によって大いに貢献したにもかかわらず、その成果はアキエ族に有利なかたちで結実してきたとはいえない。自らの努力の果実は国家に吸い上げられ、コートジボワールの他の地域、アビジャン市やヤムスクロ市の都市建設・整備、さらには北部開発に投入され、自らの居住地域はアビジャン市の周辺地域となり、その地位を下落させてきたといつてよい。このようなアキエ族のアカン語系諸族

図6-5 コートジボワールの部族構成とFPI支持



(出所) 筆者作成。

内での部族的地位が、アキエ人社会におけるPDCI支持派とFPI支持派への政治的分裂の一要因であったと考えられる。

以上に述べたFPIの台頭とコートジボワールの部族構成との関係を図示すると、図6-5のようになるだろう。

IV まとめ

独立以来初めて複数政党制のもとで行われた1990年選挙は、コートジボワールの政治史上さまざまな意味で画期的な出来事であった。

まず第1に、複数政党制の導入によって1990年春の政治危機はとりあえず収拾され、秋の総選挙は若干の混乱はあったものの無事終了し、合法の枠内で新体制への移行に一応は成功したこと、このこと自体が特筆に値する。隣国のリベリアやマリの例⁽²⁸⁾を持ち出すまでもなく、他のアフリカ諸国では政治民主化の過程で政治対立、権力抗争が内戦やクーデタを引き起こし、その収拾に苦慮している状況もあり、これらに照らしてみればなおさらである。

第2に、1985年大統領選挙では一党制下にあったとはいえ政府発表によれば100%という極限の得票率をもって大統領の座を獲得し、「国父」、「神」の座につきつつあったウフエ・ボワニが、この90年選挙でも勝ち7選を果たしたとはいえ、バボという対立候補の挑戦を受けて、特定の一派に属する一人の人間という地位に引き戻されたこと、この選挙の結果がそのことを内外に客観的に明示したことの意義も大きい⁽²⁹⁾。

第3に、この選挙の結果、FPIが9議席、PITが1議席、その数は175議席のうちわずか10議席にとどまるとはいえ、新興野党が国民議会内に地歩を確保したことの意義は大きかった。それによってPDCIは絶対多数派とはいえ一党派の地位に落ち、国家、政府、党の制度的一体化は崩壊した。事実、総選挙後の最初の国民議会の議長選挙も初めて実質的な意味をもつ手続きとなり、PDCIのコナン・ベディエ (Konan Bedié) 前議長とともにFPI、PITから

も候補が立ち、ベディエが164票を獲得して議長に選出されたのである⁽³⁰⁾。

第4に、この選挙は、新興野党勢力の進出とともにその影響もあって、PDCI内部でも新旧の交代などの変化が目立った。175名の新議員のうち再選議員はわずか61名にとどまった⁽³¹⁾。また元外相ウシェール (Usher)、一時はウフェ・ボワニの秘蔵っ子ともてはやされ今回の大統領選挙では選挙対策本部長的な役割を果たしたフォロゴ (Fologo) 元青年スポーツ相など、PDCIの大物が落選の憂き目をみた。地方自治体選挙では、北東部のポンドック市 (図6-2の10) で、前社会問題相ヤヤ・ワタラ (Yaya Ouattara) のグループが、同じPDCIのもうひとつのグループに敗退した。これらの事実は、新興野党勢力の挑戦を受けて、PDCIの内部においてもさまざまな動きが活発になりつつあることを示したといえよう。

以上に示したように1990年選挙はコートジボワール政界に若干なりとも新風を吹き込むことになったが、今後の政治の展開にとって最大の問題は、部族という枠組みがそのなかでどのように機能していくことになるのかということであろう。

1990年選挙をめぐる、それまで一党制という水面下に隠れていた部族という枠組みが、それほど明示的ではないにしても浮かび上がってきた。現実主義的政治家であったウフェ・ボワニは、明らかに部族という枠組みは政治的に有効に機能しようと考えていたとおもわれる。1989年9月の「対話集会」におけるウフェ・ボワニの演説はそのことを示している。部族という枠組みの力を評価していたからこそ、彼はそれが政党の名をかりて、政治の前面に押し出されてくることを恐れたのであろう。そしてはなはだ逆説的ではあるが、政治的民主化の名のもとに台頭してきた反体制政治勢力に対して、ウフェ・ボワニ側はこの部族という枠組みを利用したしめつけをかなり強力に展開したものとおもわれる。

ウフェ・ボワニがランシネ・クリバリに対して行った説得は、それを象徴している。反体制的な政治勢力への参加を、各個人が帰属する部族に対する反逆と位置づけようとする。30年余にわたって権力を維持してきたウフェ・

ボワニにはそれが可能であった。大統領選挙直後、アキエ族の有力者たちがウフェ・ボワニに謝罪におもむいたというエピソードは、ウフェ・ボワニに部族という枠組みの力を再確認させたに違いない。1990年選挙の際にダン族居住地域で配布されたピラ（本章注⑩参照）は、この部族という枠組みの政治的有効性に対する確信に支えられている。バボが率いるFPIも、部族横断的な政治勢力の結集をめざしたが、結果的にはベテ族、アキエ族という枠組みをこえてその支持勢力を拡大することはできなかった。

この部族という枠組みは、第3章、第4章で検討したように歴史的に政治的な単位となったことはほとんどなかった。はるかに小規模な範囲でしか存在しなかった血縁的紐帯に基づく集団意識が、今日、部族とよばれている範囲にまで拡大されたのは、むしろ植民地化による植民地的状況のもとでのことであったといえよう。たとえば植民地化前の状況であったならば、ランシネ・クリバリの部族的紐帯の意識はセヌフォ族全体ではなく、せいぜいのところキエンバラの範囲にとどまっていたことだろう。そして今日のコートジボワールの政治状況のもとでは、血縁的紐帯に基づく個人の帰属意識が実効性をもつ水準は部族とよばれる水準であろうと、ウフェ・ボワニは認識し、1990年選挙はそのことを再確認させたといえるであろう。

では、この部族を単位としその連合として成立している多部族国家コートジボワールの国家権力の正統性は、どのようにして獲得しうるのか。

これまでウフェ・ボワニ政権を支えてきた正統性の根拠は、ウフェ・ボワニ個人の「独立の父」という権威であった。この卓越した個人の権威のもとに部族横断的な挙国一致体制が実現していた。しかしバボが指摘しているように、1990年選挙の時点で、ウフェ・ボワニの「独立の父」としての権威は効力を失いかけてきた。そしてそのウフェ・ボワニもすでに死去した⁽³²⁾。今日、1995年秋に初めて選挙の洗礼を受けることになる後継コナン・ベディエ政権は、たとえ選挙に勝利したとしても、選挙という民主的手続きだけで、超部族的権力としての正統性を確保しつづけることができるであろうか。

1990年選挙におけるFPIの台頭は、Ⅲ節でみたとおり、ベテ人社会とアキエ

人社会における階層分化を反映した両部族内の政治的分裂の結果であった。それに対応してPDCIはそのなかに潜在していた部族的偏向を露呈させられた。この部族という枠組みが、1995年選挙ではどのようなかたちで発現することになるのだろうか。たとえば大統領選挙における諸政党間の争いが、1990年選挙の際にみられたように部族意識と連動するようなことになれば、その対立の收拾の方法として選挙における多数決という原理はそれほど有効とはおもえない。選挙の事前あるいは事後に、部族間の政治的妥協が何か別の方法で図られねばならなくなるだろう。

多部族国家における諸部族間の国家権力をめぐる利害の対立の調整方法としては、どのような方法がありうるのだろうか。

[注] _____

- (1) T. Bakary, "Elite Transformation and Political Succession," in I.W. Zartman and C. Delgado eds., *The Political Economy of Ivory Coast*, New York: Praeger, 1984, pp. 26-56.
- (2) *Fraternité Matin*, 29 septembre, 1989.
- (3) 詳しくは原口武彦「コートジボワールの政治危機」(『アフリカレポート』No. 11, 1990年9月) 2～6ページ参照。
- (4) *Fraternité Matin*, 29 octobre 1985. この得票率100%という発表について、国際ジャーナリズムはこの極限的数値に注目せず、単にウフェ・ボワニの圧倒的信任による再選の事実のみを報じた。
- (5) *Fraternité Matin*, 30 octobre 1990. この中間発表ののち、最終結果については、両候補の総得票数の発表のみで、各選挙区ごとの得票数については公表されなかった。
- (6) これら3選挙区のうち、1区では2名のPDCI候補者のうち1名が立候補を取り下げ、もう1区の場合にはFPIも2名の候補者を出し、結局、いずれの選挙区でもPDCIが議席を獲得した。

しかし、PITがただ1人の当選者(ヴォディエ委員長)を出したアビジャン市ココディ選挙区では、元外相ウシェール(Usher)と若手のJ・コビナ(J. Kobina)の2名がPDCIから立候補し、両人とも敗退した。各候補の得票数は以下のとおりであった。

ヴォディエ (PIT)	7,626票
コビナ (PDCI)	5,961票

ウシェール (PDCI) 4,034票

- (7) 以下、開票結果については、*Fraternité Matin*, 2 janvier 1991.による。
- (8) Laurent Gbagbo, *Côte d'Ivoire: Histoire d'un Retour*, Paris: Editions L'Harmattan, 1989, p. 57.
- (9) コートジボワールの「奇跡的」経済成長については、原口武彦「コートジボワール経済の奇跡的成長と危機」(『アジア経済』第27巻第5号, 1986年5月)を参照のこと。
- (10) CIDTを中核としたコートジボワール北部の開発については、原口武彦「コートジボワール北部の農村開発—開発公社の役割—」(吉田昌夫編『80年代アフリカ諸国の経済危機と開発政策』アジア経済研究所, 1987年)を参照のこと。
- (11) 1990年10月のココア、コーヒーの集荷期を前に、コートジボワール政府は、世界市場価格の低迷を理由に、両製品の生産者価格を一挙に2分の1に引き下げた。その経緯については、原口武彦「コートジボワールのココア・コーヒー問題(その2)」(『アフリカレポート』No. 10, 1990年3月)を参照のこと。
- (12) ランシネ・クリバリの父は、コロゴ地区のセヌフォの大首長で、ウフェ・ボワニとは1940年代から親交を保っていた。P.-H. Siriex, *Houphouët-Boigny: An African statesman*, Abidjan: Les Nouvelles Editions Africaines, 1987, p. 31.
- (13) *Fraternité Matin*, 16 novembre 1990.
- (14) この紛争の詳細については、原口武彦『アビジャン日誌—西アフリカとの対話—』アジア経済研究所, 1985年, 32~42ページを参照のこと。
- (15) *Fraternité Matin*, 25 juin 1990.
- (16) *Fraternité Matin*, 16 novembre 1990.
- (17) B. Holas, *Les Sénoufo*, Paris: Presses Universitaires de France, 1957, p. 15.
- (18) 1990年選挙でPDCIが、西部、ダン(Dan)人居住地域で配布したビラには次のように記されていた。「ダン族はバウレ族の同盟者(alliés)である。バウレ族はダン族の同盟者である。それゆえに、われわれダン人は、PDCIの候補者、フェリックス・ウフェ・ボワニを支持しなければならない」(1990年11月、コートジボワールの現地調査の際に筆者が収集)。
- (19) *Fraternité Matin*, 15 octobre 1990.
- (20) *Fraternité Matin*, 30 septembre 1988.
- (21) Gbagbo, *Côte d'Ivoire* ..., p. 26.
- (22) その詳細についてはIbid., pp. 15-44参照。
- (23) Ibid., pp. 47-62.
- (24) Ibid., p. 44.
- (25) 筆者は、1990年10~11月, 90年選挙について現地調査を実施し、アビジャン

県アニヤマ (Anyama) 郡アウエ (Ahoué) 村 (アキエ人の村) において大統領選挙の投票の様態を観察した。村内に2つ設けられた投票場のうち、ひとつの開票結果は下記のとおりであった。

有権者数	548人
投票者数	321人
有効投票数	316票
ウフェ・ボワニ	174票 55.1%
バボ	142票 44.9%

- (26) もちろん部族別の得票数の集計は行われていない。したがってガニョア県の場合、バウレ移入民の多くが部族的連帯からウフェ・ボワニ、PDCIを支持したことは十分に考えられる。
- (27) 注(25)で記した筆者のアキエ人村の観察でも、バボ支持をはっきり表明していた村民は、このような類型の家族に属していた。
- (28) 1989年12月末に勃発したリベリア内戦については、原口武彦「リベリアの内戦」(『アフリカレポート』No. 12, 1991年3月)を参照のこと。マリでは1991年3月25日、民主化要求デモの弾圧による混乱の最中、クーデタが発生、ムサ・トラオレ政権は崩壊した。
- (29) 大統領選挙公示後もバボに対して、立候補を取り下げさせるための働きかけが、ウフェ・ボワニ陣営側からなされたという。 *Jeune Afrique*, No. 1566, 2-8 janvier 1991, p. 24.
- (30) *Fraternité Matin*, 24/25 décembre 1990.
- (31) *Fraternité Matin*, 28 novembre 1990.
- (32) 1993年12月、ウフェ・ボワニの死去後、憲法の規定に従いコナン・ベディエ国民議会議長がウフェ・ボワニ前大統領の任期終了(1995年10月)まで、大統領職を引き継ぐことになった。その経緯の詳細については、原口武彦「ウフェ・ボワニ大統領の死」(『アフリカレポート』No. 18, 1994年3月)34~37ページ参照のこと。